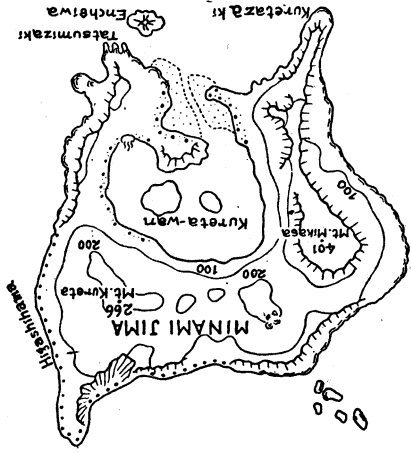
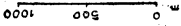


# 千島の思出 (XI)

操 脇 館



## 宇志知島

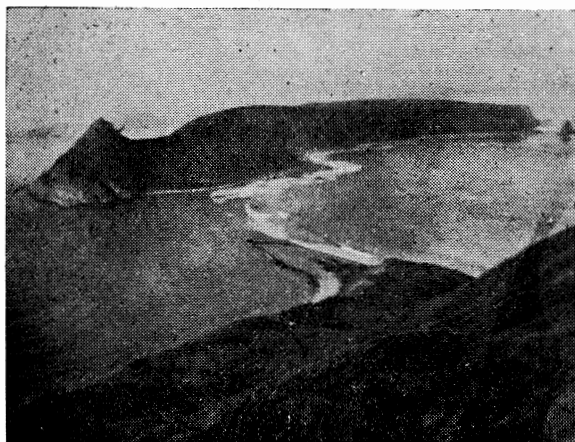
中部千島の真中あたりに、地圖では見落しそうな小さな愛すべき二つの島がある。即ち宇志知南島と北島がこれである。計吐夷島から東北に約一四哩、羅處和島から西南に約九哩、ことに羅處和島との間の潮は速く、いわゆる千馬波(ひどい三角波)がたちがちであった。兩島とも林というものがなく、草原とヒースからなっている。南島の東北端に短岬をなす鈴木崎と北島との間はわずかに四三〇メートル。そこには岩礁直線的に連つて、大潮まわしの干潮には歩いて渡れるともいわれている。

南島は徑二・五キロメートル、南北に位置し、ほぼ四角形をなしている。暮田山(二六六メートル)と御笠山(四〇一メートル)が東西に對して、その間に暮田灣の深い變入があり、中部千島隨一の勝景をなしている。そして海岸線の半分以上が斷崖をなし、他は急斜面下の礫濱である。これに對し北島は長徑一・八キロメートル、短徑一・二キロメートルの西南より東北にかけての奴形をなし、急傾斜の南端を残して、ほとんど斷崖にめぐらされている。最高點は二二〇メートル、全島が一つのテレーヌ地形である。

この兩島調査は昭和四年九月九日から一週間滞在したのと、昭和三年九月一日、昭和四年七月三十日、三十一日昭和五年五月、二十三日、六月九日、それぞれ寄港の時を利用した昭和四年九月の滯島中晴れた日は一日に過ぎず、それも山は霧をまいていて南島はどうにも寫眞にならなかつた。霧には随分となれた私にとつても、宇志知の霧には相當なやまされた。中部千島の海霧といえば、今も私はすぐ宇志知を反射的に思出す。千島は世界でも有難くない海霧の名所、千島でも中部千島にはそれがひどくということになると、宇志知は海霧の點ではまさに世界的な存在ということになつてくる。このため私達もこの島での標本手入れには、かなりなやまされた。

太平洋とオホツク海の波の思出も深い。秋近む鈴木岬附近にたつて見ていると、太平洋の波浪は次第にその頭を高くあげてくる日が多くなる。そして荒天のあとなど、オホツク海は比較的早く平穩になるのに、太平洋は不機嫌な日をつづることが多かつた。「太平洋とオコック海」と心にくりかえしつゝ、幾度私はひとり海を見守つたことだらう。

「暮田灣」南島の暮田灣の暮田はクレター(Crater)をもじつたものらしい。圖に見るような素晴らしい地



(南島より北島を望む)

形をしており、湾外には圓頭岩が、ぼつねんと立っている。船の人達は時がないので、滅多にこゝを訪れない。しかしどの人も暮田湾のすばらしさは稱えている。一度印象づけられると決してその印象がうすくなるというところらしい。暮田湾の岩壁には

またすばらしく海鳥が巣くつていた。夕方などその背がかまびすしいほどであった。

この湾の東岸に温泉が湧出している。そしてそこには素朴きわまる一人入りの湯槽がしつらえてあつた。中部千島の絶景と推稱してよい眺めをほしいままにするこの入湯は、原始相を誇る中部千島のもつ醍醐味のひとつでもあつた。

海鳥の多い關係からか、この温泉のあたりには青狐が多かつた。「温泉に入る時には一人ずつが入り、一人は衣類の番をしているのだよ」と私達は船の中でも、陸でも注意された。それは人を恐れることを知らない狐が、傍まできて、何でもくわえて行つてしまうからだそうである。或る時には帽子をもつて行かれたそうだし、或る時はパンツさえくわえられて行き、フル／＼で歸つてきた人もある由。そして「多分女狐だつたのだらうな」とひどく看にされたそうである。

私とTは南島に滞在中、二度ばかりこの温泉に入りに行つた。この温泉に行くには鈴木岬の近くにある越年舎から一キロメートル、二〇〇メートルの峠を越して行くのであるが、全島草原といつてもよいこの島の初秋、晴れた日には何ともいえない秋のさ光ビカリが感じられ、草を吹きわけゆく風に、いうようのない旅を覚え

たものである。そして峠の頂きに立つと、可愛らしい北島がいかにもおだやかな姿を横たえ、南の眼下には御笠山から暮田湾の優れた風致が展開される。それから南斜面を下りきつて礫濱を一キロメートルばかり行くと温泉である。Tと行つた時にも、青狐が人なつっこく間近に来て、自然児のTをすつかりよろこばしてしまつた。「素晴らしいところですね。全く船の人の言つた通りだ」と讚美これしきり。自分もうなつてしまつた。渡り鳥の大きな群が、空の一隅をくらくするやうに北から南に動いて行つた。

二度目に行つた時には、既に紹介した農林省の宮武さんと、越年舎の幡磨君と、Tとの四人。この時の一



(ヒースの中にガンコウラン)  
を樂しげに摘む宮武さん

同が如何に愉快だつたか。とつておきの水瓜を喰つて無邪氣きわまりなき自然児の姿に歸り、全々小半日を過してきた。

〔越年舎〕この時の島守は長年島にいつている幡磨君夫婦。二人とも非常に奇饗好きであり、しかもこの料理はうまいので、船の人達のオアシスのひとつでもあつた。この名物は千島海苔とウニの塩辛。海苔は最もよい時期を選び、しかも製法が丁寧なので、色艶といい、味といい、市井の販賣品など、脚下にも及ばない。私がアリユウシアン列島の洋上に一月後の日を送り、中部千島で一月を送り、約二月半目で本式のキャベツの味噌汁を食べた時、キャベツの味噌汁とはかくもうまいものであつたかと舌鼓うちつつ讚歎したものである。時にはウルツプ丸が色丹から冷蔵してきてくれた鯨の尾肉オシロイの刺身や鎌倉焼など、忘れ得ぬ味覺である。海のおだやかな宵など、ウルツプ丸がいつもむつつりと氣むずかしい顔している鶴澤船長も、「先生、どうですかね」とゆつくりくつろいだ顔して、手拭さげてボートからあがつてきたものである。

宮武さんはこの越年舎の附近で、柵飼している銀狐と青狐にビタミンの實驗をやつていた。植物オンリーで終つていたその頃の私は、あまりその實驗の話も深

く聞かなかつたが、今にしておもえば、もつとよく聞いておけばよかつたものをと、悔やまれる。しつとりとした濃霧の夜など、ストーブをかこみ、ランプの芯をたて、澁い番茶をすゝりながら、宮武さんはアリユウシアン群島のウナラスカヤ、プリビロフ群島、さてはコマンダー群島、アラスカのブリツスルベイの話をもツリ／＼と聞かせてくれた。こう書いてみると、Tと二人、幡磨君と宮武さんの手傳して倉庫建をやつたことなども、今更に思出される。

〔北島のテレース〕北島の越年舎の背後、イワノガリヤスの草原を高距一〇〇メートルもあがると、北島のテレースに出る。最高點一二〇メートル、一キロメートルにわたり、高さ八〇メートル、殊に高距九〇メートル前後は廣い平坦地といつてもよい。北洋的色彩の極めて強いところで、ガンコウランやクロマメノキの優占したヒースが、その台地上によく發達し、アリユウシアン列島のアムチトカ島をひどく思い出した。私はこのヒースによく苔の實と呼ばれるガンコウランを食べに行つた。宮武さんも一諸で、寫眞は宮武さんの「中部千島」のいわゆる村長さん振がよく出ている。わだつみと雲。私達はマツトのようなガンコウランの原でよく熟れたその實をつまみつゝ、その二つにひた

りきつたこともある。

私はまたこのテレースの南側の斷崖で、イヌナズナ屬に屬する奇草を採集した。イヌナズナ屬というのは大低一〇センチメートル以下の小草であるが、葉も肉質で、高さもあり、黄色い小花を開く見たこともないものであつた。歸つてから精査したところ、アリユウシアン列島とカムチャツカのごく一部に産する珍草でまだ千島には知られていない植物であつた。私これにイシノナズナという新和名を下し、中部千島の研究に一方ならぬ援助を興へてくれた農林省水産局石野敬之技師を長く記念することとした。石野さんはいわゆるラッコボート時代からの立役者であり、中部千島の主であり、失禮に當るかもしれないが、北海の親分でもあつた。一年に一回は必ず白鳳丸か、ウルツプ丸に乗つて中部千島を一巡したものだ。子供達へのお土産をもつて、童顔をほころばせるように島々に下りたつ石野さんの姿は、北海の猛者の別の一面をよくあらわしていた。

